

ファルト内、ディアヴロ達一行が滞在している宿の中。

「女性限定のクエストだと？」

いそいと外出準備をしているシエラとレムへ、ディアヴロは聞き返す。

「そうだよ。シルヴィさんの発案で、最近そういうのが出来たんだ。良い経験とお金になるって、女の子の間じゃ結構評判なんだよ」

シエラがいつもの笑顔でディアヴロに説明する。

——いや、いつもの笑顔のはずなのだが、その表情にはどこか艶っぽいものを感じる。男を誘惑するような流し目や、ぷっくりと膨らんだピンク色の唇を強調させるような喋り方

(い、いやいやいや！　どんだけ欲求不満なんだよ、俺！)

ディアヴロは顔を真っ赤にして、自分の中に生まれてきたそんな考えを必死に否定する。

ディアヴロが紆余曲折あって、常に行動を共にするレムやシエラと関係持ってから、数か月は経過している。最初はお互い上手いかなかったものの、回数を重ねることに慣れていき、何よりもレムもシエラも、一生懸命にディアヴロを愛してくれているのが分かった。

ちょうどそんなことを思っていた矢先——最近になって、彼女らとの行為は急に一切なくなった。別に断られたというわけではない。そもそも『魔王のロールプレイ』という殻を被らなければコミュニケーションが取れないディアヴロが、積極的に自分から誘うことなどないのだ。

これといったきっかけはなく、今までは週に2～3回はあったその行為が、なんとなく気づいたら無くなっていたというだけ。まるで彼女らとそういう関係など、最初からなかったかのように。

そうなってしまえば、健全な男子であるディアヴロも欲求不満になることは、ごく自然なことだった。

(.....そうだよ。したいなら言えばいいんだ。レムもシエラも、俺の事をこれだけ思ってくれるのは分かってくるくせに.....俺はどれだけヘタレなんだよ)

やはり人はそう簡単に強くなれないのか。少しは成長できたと思っていたが、男として肝心な部分は弱くてヘタレなまま。情けない自分に、ディアヴロは拳を握った手を震わす。

(いや、そうじゃない。今日こそはそんな自分の弱さを超えるんだ。ロールプレイの魔王じゃなくて、本当の自分として)

「レム、シエラ。実は――」

「それじゃ、ディアヴロ。行ってきますので、留守番をお願いしますね」

意を決して言葉を発したディアヴロの心を挫くように、準備を終えたレムが言葉をかぶせてくる。するとレムはディアヴロの腕に抱き着くようにしてくと、その乳房を押し付けてくる。

(そ、そういえばレムも、最近色っぽく.....)

シエラの無邪気さとは違い、レムは意識的にやっているという感じがする。シエラに比べれば肉付きの足りないその身体の柔らかさをディアヴロに伝えるようにしながら、耳元へ唇を寄せて

「いい子に待っていたら、ご褒美をあげますからね」

ふうと吐息を吹きかけながら、さりげなくディアヴロの太ももを撫でてくる。完全に確信犯だ。あの真面目なレムなだけに、余計に妖艶に感じられる。

「それじゃ、ディアヴロ待っててねー」

「お土産を楽しみにして下さい」

そして宿を出る時には、すっかり今まで通りの2人に戻っているようだった。

一人で心の中で葛藤し、人生で重要な決断をしたくらいに緊張していたディアヴロだったが、すっかり毒気を抜かれたような顔で、出て行く2人を見送った。

1人残されたディアヴロだったが、腕にしがみつかれたレムの体温の感覚は残っているようで、長らく発散していない彼の股間はすっかりテントを張っていた。

「はあ.....仕方ない。今日も一人で処理するしかないか.....」

なんだか妙に情けなくなりながらそんなことをつぶやくディアヴロだった。



場所は変わり、エミールが取っている宿へ。

エミールは、少し前に利用していた冒険者用の一般宿から、ちょっと良い身分の人間が利用するような、それなりに高級な宿へ鞍替えしていた。

その部屋の家具や広さも、やはり一般宿と比べれば、それなりに豪華で広いものだった。

「っあああ♡ あああっ♡ ち、ちょっと待ってくれよエミール♡ あああんっ♡」

そんな部屋に置かれているダブルベッドの上で、冒険者教会会長のシルヴィが四つん這いになって、後ろからエミールに犯されていた。

「はあっ、はあっ.....！ キミも素晴らしいよ、シルヴィ」

エミールは息を荒げながら熱っぽく言葉を掛けると、シルヴィはビクンと身体を反応させてしまう。

「こ、こんなのおかしいだろう？ 君は、こんなにたくさんの女の子と関係を持っていたのかい？ セ、セレスティーナさんも何か言ってよ？」

エミールに犯されながらシルヴィは助けを求めるように、ベッドの脇に立っているセレスティーナを見上げる。

「何を言っているのかしら、シルヴィさん？ ご主人様に愛されるなんて、女としてこれ以上の幸せはないですよ？」

ニッコリと微笑むセレスティーナも、エミールやシルヴィに倣うように全裸である。彼女の形の良い豊かな乳房も、決して誰にも晒したことの無いであろう秘部も丸見えという有り得ない姿。そして何よりも一番の違和感があるのは、額に刻まれたあのピンク色の紋様である。

「セレスは、女の子の中でも一番最後まで素直になれなかったからね。愛の証を、脳に直接刷り込んであげたのさ」

何故か誇らしげにエミールが腰のピストンを続けながら、説明口調でシルヴィに言う。そんな彼に首元には、相変わらず謎のネックレスが謎の発行を繰り返していた。

「な、なにそれえ？ お、おかしいよおっ.....あんっ♡ あああんっ♡ 奥まで抉られて.....あっ、あっ、あっ♡ エミールうう♡」

嫌がる素振りを見せながらも、もうシルヴィの表情は笑いながら、声が甘く蕩けていた。ネックレスの魔力の影響に屈し、エミールから打ち付けられる甘い刺激を受け入れ始めていた。

「この娘は呆気なかったのだ。やはりご主人様は、この世で一番セックスが上手くてイケメンなのだ。ちゅば.....ちゅっ.....」

「ご主人様、エデルガルドは、少しだけ嫉妬する。本当は、エデルガルドだけ、愛して欲しいのに.....あむ...ちゅううっ.....」

既にエミールに隷属しているエデルガルドとクレブスクルムは、彼の両脇から顔を覗かせるようにすると、乳首を吸ったり舌で転がしたりと、奉仕を行う。

「うううっ..... 2 人とも、嬉しいよ。大丈夫。ボクは誰でも平等に愛するから。ふう、そろそろかな？」

「んあああああ〜〜〜っ♡ にやあああっ♡」

あからさまに反応が変わってきたシルヴィを愛でるように、エミールは尻肉を撫でながらシルヴィの痴態を見下ろしていた。

「ご主人様。私もご奉仕をさせていただきますね。失礼します」

そう言って行為を見守る様にしていたセレスティーナもベッドの上になると、彼女はエミールの後ろ側へ。そしてエミールの尻肉を左右に広げるようにすると、後ろの穴を舌で奉仕し始める。

「うおおお！ あ、あのセレスがそんなことまで.....はあ、はあ.....シルヴィ、伝わるかい？ この娘達からボクへの愛が.....そして、ボクから君への愛がっ！」

「ふにゃああっ.....し、知らないそんなのっ.....！ っふあ.....な、中でエミールのが更に硬くなって.....どうにかなりそおっ♡」

顔はすっかり完全に蕩けながらも、最後の一線でシルヴィは理性を保ち続ける。

その時――

「やっほー。遅くなってごめんね、ご主人様ぁ♪」

「こらっ、バカシエラ！ 今の私達のご主人様なんですから、もっと敬意を払いなさい！」

「あ、ああ.....」

いつもの凸凹コンビであるレムとシエラが入ってくる。信頼のおける知り合いに、シルヴィは助けを求めるように手を伸ばすが――

「あ、もう少しだねー」

「ええ。彼女も立派なご主人様の愛奴隷になれそうですね」

そもそもこんな状況のこの部屋に来られるということは、既に彼女らも堕ちてしまっているということだ。

それでも.....と、シルヴィは最後の望みを捨てずに、継るように入ってきた2人へ助けを求めるように視線を送る。

しかしシエラもレムも、今までシルヴィが見たことのないような妖艶な笑みを浮かべて服を脱ぎだす。

シエラは乳房に刻まれた、レムは腹部に刻まれた、セレスティーナ達と同様の紋様を見せつける。

「あっ.....あああ.....」

それを見せつけられて、シルヴィはもう助からないという絶望に諦観する。

「さっ、私達も加わろうよレム」

「もう、貴女は本当にいつも軽いですから。それでは失礼しますね、ご主人様」

シルヴィを犯し続けるエミールへの奉仕へ、シエラとレムも加わる。

「おちんちんも乳首もお尻も取られてるからあ、私は背中におっぱい押し付けてあげるね～。ほらあご主人様あ
.....シエラの大きいおっぱい感じる？ 大好きだよお」

シエラはその言葉通り、柔らかで豊満な乳房をエミールの硬い背中に押し付けながら、首筋へと舌を這わせる。
。

「失礼します、ご主人様.....ああ、愛しています♡ 舌をお出してください.....あむ.....ちゅば.....」

レムはレムらしく、熱っぽい表情でエミールを見つめながらその唇を塞ぐ。

「はぁっ、はぁっ.....皆、ありがとう！ やっとボクの魅力に気づいてくれたんだね！」

「当然なのだ。ご主人様、大好きなのだ♪」

「エデルガルドが、一番ご主人様を、愛してる」

「ご主人様、お慕いしております」

それぞれが熱っぽく愛の言葉を紡ぎながら、自分が一番だと言わんばかりに熱烈に愛撫を続けていく。それで興奮を快感を倍増させたエミールが、腰の動きを加速させてシルヴィを責め立てていく。

「ほらっ、シルヴィも早くっ！」

エミールが語気を強めてシルヴィの腰を両手で固定し、腰を打ち付けていく。

「っうあああ♡ ボクは、ボクはぁっ.....♡」

『墮ちろ♪ 墮ちろ♪ 墮ちちゃえ♪ 早く墮ちろ♪』

エミールへ奉仕を続ける5人の女性がエミールの腰の動きに合わせて、シルヴィへ悪魔の誘惑のように声を掛ける。

肉同士がぶつかり合う音、淫液がかき混ざる音、エミールの熱い吐息や、女性達の合唱に

「す、好きiiiiii♡ エミールっ、ボクも好きだよ♡ 大好き♡ 愛してりゅうううっ♡」

舌を突き出しながら乱れるシルヴィの瞳にハートマークが浮かび上がる。そしてシルヴィも自らエミールの肉棒を深く啜えこむように尻を高く突き上げるようにして、きつく締め上げる。

「う、うおおっ！ で、出るっ！」

絶世の美女達の奉仕に加えて、挿入している膣からの痛いくらいの締め上げ。さすがにエミールも耐えることが出来ずに、腰を最も深く突き入れたところで精を吐き出す。

「うあっ.....あっ.....あっ.....♡ 出されて.....中に出てるっ.....ドクドクって.....ご主人様の愛が、ボクの子宮にどんどん注がれて.....あああっ、し.....幸せ過ぎるっ♡」

シルヴィはガクガクと痙攣し、雌の絶頂と同時に雄の精を受け止めるという最高の快楽を刻まれてしまうと同時に、レムらと同じ紋様が刷り込まれる。シルヴィの場合は、背中に。

そうしてシルヴィにも隷従の紋様を刻むと、エミールのネックレスはいつもと同じように光の輝きを失うのだった。

「はあ、はあ.....う、おおっ！ き、キミたち.....！」

シルヴィの中で射精して満足感に浸っていたエミールだが、その周りの女性達は、まだまだ執拗にエミールへの奉仕を続ける。すると挿入されたままの肉棒が、すぐにムクムクと硬さと大きさを取り戻していく。

「っっあああ♡ ご、ご主人様っ！ また勃起してるっ♡ ま、また愛されちゃう♡ これ以上愛されたら、頭が幸せになっておかしくなるっ♡ ご主人しゃま、だいしゅきiiii♡」

激しい絶頂で気をやっていたシルヴィが悦びの声を上げる。

「いいですよ。シルヴィは新しく嫁奴隷になるのですから、今日は特別です♡ たくさんご主人様の愛を注いでもらって下さい。んちゅ.....ちゅば.....私達は、お手伝いに徹しますよ」

レムは目を細めてエミールと口づけを交わしながら、そんな言葉をこぼす。

「っにゃあああ♡ う、嬉しい♡ も、もっと愛して♡ 激しく突いて下さい、ご主人様♡ しゅきな♡ すぐしゅき♡ 愛してるうっ♡」

再びエミールに突かれながら呂律が回らなくなるほどに乱れたシルヴィの眼には、すっかりハートマークが浮かび上がっていた。そして背中中の紋様もくっきりと形を残している。

「キミたちは最高だよ！ この調子で、どんどん世の女性にボクの愛を届けないといけないねっ！」

夢中になってシルヴィを犯しながら、エミールは爽やかにそんなことを言う。エミールはネックレスのことなど存在すら忘れていたかもしれない。今まで自分が女性達に尽くした、その努力成果が、今の現実だと信じてやまなかった。

「ええ、ご主人様♡ これからもご主人様をお慕いする女性が増えていくでしょう♡ その時のために、私達の身体を使って、愛の行為に慣れていて下さい」

レムだけでなく、奉仕をしているだけのクレブスクラム、エデルガルド、セレスティーナ、シエラも顔を赤らめながら、自分の秘部を弄りながら、その興奮と快楽に酔っているようだった。

「愛しています、エミール様♡ これからも永遠に♡」

うっとりとした瞳と声で熱い吐息を吐き、レムは永遠の愛をエミールに誓いながらキスを交わすのだった。